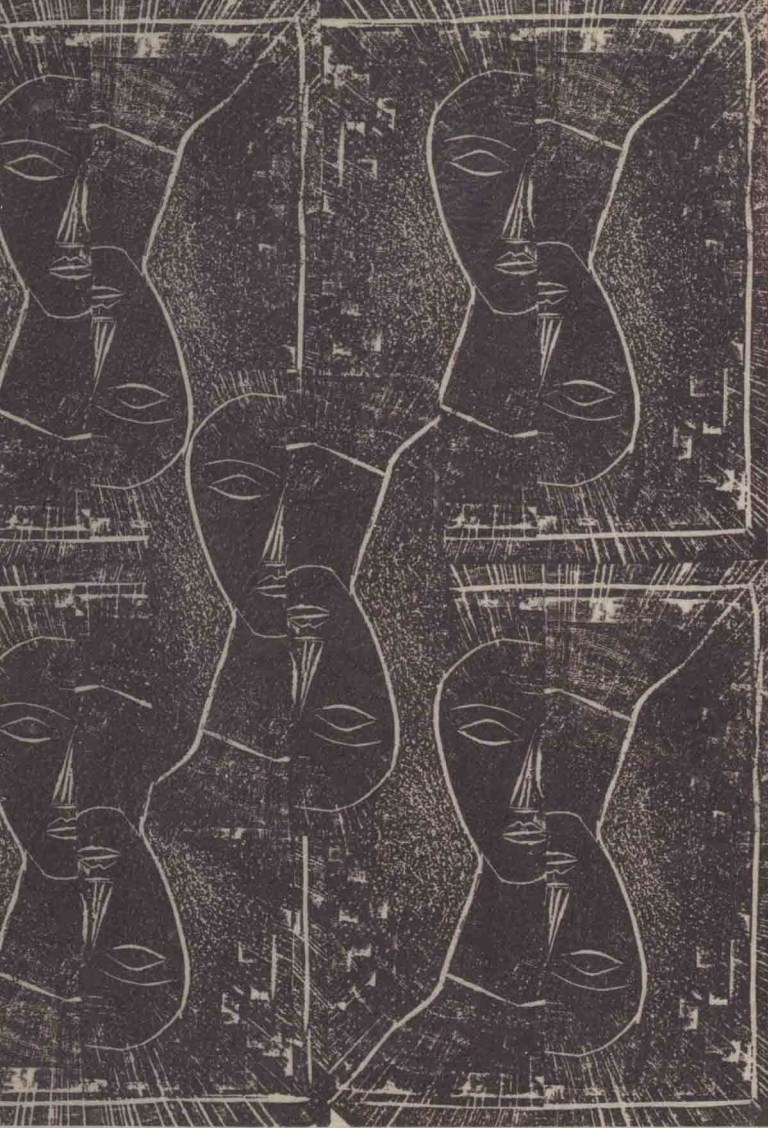


逢魔物語

津島佑子



逢魔物語

津島佑子

講談社

おうまものがたり
逢魔物語

一九八四年六月二十日 第一刷発行

著者——津島佑子

© Yuko Tushima 1984, Printed in Japan

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽一三二三 郵便番号二三 電話東京三—四三—二二(大代表) 振替東京—五五〇

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——大製株式会社

定価——一一〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

厨 子 王	お ろ ち	菊 虫	三 ッ 目	伏 姫
219	169	115	59	7

装
幀
—
司
修

逢
魔
物
語

伏

姬

犬が欲しい、と上の子どもがまた言いだした。片言が言えるようになってから九歳になるまで、年々体の大きさも顔つきも変わっているのに、望みはいつも同じだった。犬を飼う人間に自分もなりたいたいという平凡な願い。

葉子は線路脇の細い路地に並ぶバーの扉のひとつに小さな生きものがつながれているのを見た。近づいて、それが犬であることを確かめてから、しゃがみこんで犬の顔を眺めた。一緒に歩いていた明石も脇に寄ってきた。暗がりに身を丸めていた犬はまだほんの仔犬で、しかしすでに成犬と少しも見劣りのしない顔つきのブルドッグだった。ブルドッグの仔犬は突然眼の前に来た二人の人間に怯えもせず、喜びもせず、ただ立ち上がって正面から葉子の顔を見返した。バーの前で何時間も待たされて、通りがかりの人間たちに珍しがられるのにも飽きてしまった様子だった。人間が手を出して体のどこを撫でても、抱き上げても、おとなしく我慢する覚悟もできていた。しかし、葉子は犬の体に触れたくはなかった。仔犬がまともに見返すので葉子にはそのつもりはなかったのに、犬と睨み合う形になってしまった。

——ブルドッグね。頭がすごくいいみたい、この犬。

犬から眼を離さずに、葉子は呟いた。

——うん、利口だ、この犬は。

明石も葉子の隣りにしゃがみこんで、仔犬を眺めていた。

子どもが犬を欲しがらなくて、と葉子は自分の子どもたちの顔を再び思い出すと、犬を欲しがり続ける自分の子どもではなく、こうした犬そのものがいつまでも、どこでも、生き続けていることを呪いたくなった。狼などはこの国ですっと前に絶滅したというのに。たしか、犬と馬の祖先は同じ生きものだったのではないか、とも思う。その祖先が二種類の生きもの、つまり馬と犬に方向を別にして少しずつ進化していくさまを描いた簡単な絵が脳裡に浮かぶ。片方は小さくなり、片方は大きくなる。小さな犬と大きな馬。両方とも、利口な動物だ。計算できる馬とか、会話のできる犬もいる。だから、馬と犬が同じ祖先を持っているというのにも納得がいく。そして、その祖先である生きものの知能はよほど高かったことになるのではないか。犬と馬の祖先であるからには、現在の人間などよりもはるかに鋭く、正確で、深い知力を持っていた、と考えたくなる。成行きで、今は人間の世のなかになってしまっただけでもない。

葉子が最初の子どもを産んでから、九年経っていた。誕生日には、なにかを買ってやることに決めていた。今年も、どんなものが欲しいか、葉子に言われなくても、その女の子が自分であれこれ考える時期になった。そして、相変わらず、同じことを言いだした。ほかに欲しいものなんて、なにもない。これからずっとなにももらえなくてもいい。犬を飼いたい。

この間は、日曜日の夕方、買物の帰り道で女の子が言いだした。葉子はサラダ・オイルやじゃがいもで重くなった袋に息を切らしながら、これも毎年同じような言葉で答えた。ばかなことを言うな、と頬のひとつでも叩いてやれば、それで女の子は自分は犬と縁のないことを悟るのだろ

うに、と我ながら、齒がゆかったし、うんざりもした。

庭もないのに、うちみたいところで無理だつてことが、まだ分からないの。大家も許してくれないわよ。こっそり飼うにしたって、犬はおもちゃとはわけがちがうんですからね。ぬいぐるみで充分よ、ウンチもしないし、散歩もいらぬい。

軽い荷物を持たせられ後から従いてきていた二番目の男の子が姉への競争意識で、甲高い声を張り上げた。

ぼく、へビがいい！

葉子も女の子も振り向きさえしなかった。

ただど下の部屋の人、犬をすごく可愛がつてるよ。子どもがいないから、子どものように大事にしているんだって、言つたよ。

ぼく、へビ、と男の子は葉子の手を引張ったり、前に来て葉子の腹を叩いたりしてわめき続けた。

あんなの、気持悪いよ。あんた、ああいうの変だと思わないの？ あの子ヒステリーばあめ、気が向くと上や横にどなりこみに来るんだから。

ぼく、へビ！

大体、あんな暗い部屋のなかに閉じこめて無理に飼うなんて、残酷だよ。犬って、広いところを自由に走りまわるものなんだから。

お母さん！

下の犬だって、かわいそうに、とっくに頭がおかしくなってるよ。とにかく、あたしは自分の

子ども二人で手いっぱいなんだから、これ以上、ぎゃあぎゃあうるさいのはたくさんだ。

いくらわめいても相手をしてもらえない男の子が泣きだし、女の子は不機嫌な顔で黙りこんだ。葉子は男の子に顔を向け、なにをさっきから、あんたはうるさくしてるの、と叱りつけた。

上の子どもは諦めたわけではなかった。母親の気分が変わりやすいことを知っているから、また頃合いを見て、しつこく自分の望みを訴え続けるつもりでいる。そして葉子も、自分の子どもがどれほど動物が好きで、特に犬に執着しているか、知りたくなくてもいやと言うほど思い知らされているのだ。赤ん坊の頃、いちばんはじめに言えた言葉が、ワンワンだった。四ツ足の動物なら、みなワンワンだったのだが、絵本でも犬の絵が出てくればいかにもうれしそうに声を出して笑い、一歳の誕生日に知人からもらった白い犬のぬいぐるみ人形をいつでも胸に抱き、寝床でも一緒に寝、保育園にも連れて行き、葉子が気がついた時には、犬の首にあった赤いリボンを左手の指先でいじりながら、右手の親指を吸う癖が付いてしまっていた。それから葉子もその癖を取る工夫を繰り返したけど、いまだに蒲団のなかで誰にも見られないようにして、親指を吸い続けている。中身が少しずつ抜けて、瘡せ細った犬のぬいぐるみも、タンスのなかにしまっている。その間に、上の子どもの父親はいつの間にか、どこかに行ってしまった、ほかの男がよく母親のそばにるようになって、母親のおなか膨らみ、弟が生まれ、やがて、弟の父親もいなくなった。三歳違いの弟の世話も大好きな女の子で、歌を歌ってあやしたり、服やおむつを取り替えたり、オテ、オスワリ、としつかけたりしていた。犬じゃあるまいし、とその頃はよく、葉子も笑わせられていた。

もうこのぐらいでいいだろう、と思い定めたのか、仔犬はふと体の向きを変え、地面に寝そべ

ってしまった。葉子と明石は顔を見合せて笑い、立ち上がった。パーのなから物音も洩れ聞えず、路地は静かだった。そこを抜けると、山の手線の線路に沿った土手道が続いた。風当たりの強い道で、寒さに身を縮めずにいられない。片側に、高層の真新しい都営アパートが建っている。その建物がなかった頃は、風の強さもさほどではなかったのだろう。葉子の住むアパートは、路地の反対側を二十分ほど歩いたところにあった。二人の子どもは、もうその部屋で眠っている。同じ部屋の隅にある木箱のなかでは、モルモットも二匹、寝ている。上の子どもがウサギの赤ん坊だということで半年ほど前に友だちからもらってきて、葉子もそう信じていたのだが、いくら餌をやっても耳は伸びず、脚もウサギの脚のようにはならず、どうやらモルモットらしいと気がついたのは、先月のことだった。野菜屑を与えても与えても、たちどころに食べ尽し、ヒーヒーと悲鳴のような声を出して、空腹を訴える。食欲だけの、愚かな生きものだった。モルモットの箱の横には、小さなハムスターも寝ている。こちらは四角い鳥籠を葉子を買ってきてやった。木の箱では齧じって穴を開け、逃げだしてしまふのだ。ハムスターも、上の子どもがどこからかもらってきた。更に、通路を兼ねたベランダには、亀とヤドカリとドジョウとイモリ、それにミミズがいる。これもそれぞれの眠りに、身を沈めている。

八時頃に、葉子は明石から電話をもらった。夕飯の食器を洗っている最中だった。仕事を終えた明石が葉子に連絡を取るのには、大体、そんな時間になる。それから急いで、子どもたちを風呂に入れ、蒲団に入れ、おやすみ、と声を掛けてから、葉子はアパートを出て駅に向かった。明石は、まだ駅に着いていなかった。

——利口な犬と言っても、……。

葉子は明石の横顔を見て、言った。髪が若い頃と変わったように思えた。細く、乾いた毛になっていた。しかし白い毛が多くなったから、そのように見えるだけなのかもしれない。五十歳になろうとする明石に、葉子はまだ慣れることができずにいた。

——どの程度まで、利口なのかな。

——計算とか、暗記なら、犬の方がよっぽどできるんじゃないの。それに、テレパシーがよく働くらしいから、読心術もできる。

——……あたしも犬がどんなことを考えているとしても驚かないけど、ただ、頭がいいんだったら、自分の体をなにかで隠したくならないのかしらって、不思議な気がするの。ほら、アダムとイブが知恵の実を食べたら、まず恥かしくなって、葉っぱで互いが違う部分を隠したって話があるじゃない？ 犬はどうしてそうならないのかな。

——体に毛が生えているから、別にかまわないんじゃないかな。

答えてから、明石は葉子の顔を見て、笑った。

——でも、短い毛の犬だっているわ。どう言うのかな、頭が少しでも働くようになったら、いとか、いやだっという気持ちのほかに、恥かしいっていう気持ちが出てくるんじゃないの。人間の子どもなんかはそうよ。おちんちんや、ウンコのこと、すごく気にするわよ。

——そうだなあ、だけど、生まれた時からオシメしてるだろう。親がそれで恥かしがっているし。犬と同じように親がしていたら、人間の子どもだって気にしないよ。

バスの通る表通りに出た。夜が早い界限なので、もうほとんどの店が閉まっていて、通りを走り抜けていく車の音が耳に響く。信号が変わるのを待って、明石と葉子は横断歩道を渡った。再

び、線路沿いの土手道が続く。庭の広い屋敷と旅館が並び、道は静まりかえっていた。

——気にしないかしら。ある程度はそういうことあるかもしれないけど、でも、ウンコにしても、小さな子どもって、自分の体の一部分みたいに思ってるわ。好きなよ、とても。だから、さっさとトイレに流されたりしたら、すごく悲しむの。そういうことって、犬にはある？

——さあ、どうかな。……だけど、電柱にオシッコをひっかけて、自分の縄張りを作るんだから、自分のオシッコは自分のものって、はっきりプライド持っているってことにならない？ でも、プライドと好きは違うか。

——……だって、うっとりしているのよ、自分に。ほれぼれして、可愛いなあって思うの。だから、人に知られるのが恥かしくもなるのよ。こんな可愛いもの、誰にも知られたくないって。

葉子は笑った。土手の下を、山の手線の車輛が通り過ぎていった。車内が明るく、意外なほど、なかの様子がはっきり見えた。桜の若木が土手の縁に等間隔に植わっている。赤味を帯びたつぼみが、裸の枝に、虫のようについていた。つぼみが開きはじめるのも、あと一、二週間のことだった。

——ここで、いいわよ。

足を止めて、葉子は言った。明石が先に、一軒の旅館のなかに入って行った。

畳の部屋に落着き、日本茶を二人で飲んだ。

——犬が、交尾するために、わざわざこんなところに来るなんてことも、考えられないわね。誰がみても犬はおかまいなしだから、人間は犬を馬鹿にするんでしょう？ 聖書の話だって、そういう意味よね。……ああ、そうだ。あんな話をいろいろ書いておかなくちゃならないほど、

昔は、人間と動物の区別がはっきりつけられなくて、困っていたのかもしれないよね。どっちがえらいのか、決めておかないと、人間だって、自信を持てなかったのよ、きっと。そう思わない？

葉子は声を弾ませた。明石は頷き、立ち上がって隣りの部屋にある蒲団に寝転がった。葉子も蒲団の上に移り、うつ伏せに寝た。

——それで、動物と違うように、違うようになって、いろいろなものを作ったり、決めてきたりしたのかもしれないね。名前も知らないのに、通りすがりの女と男は突然、交わろうとしたらいけない、とか、女は人間以外の動物を刺激しないように気をつけなくちゃいけないとか。……生まれてきた赤ん坊が毛むくじゃらだったり、歯が生えていたりしたら、すぐに殺さなくちゃいけないとか。……そう、あたしが二人目の子どもを産んだ時も、よくもそう簡単に子どもを産めるもんだ、動物みたいだって、言われたわ。最初の子どもの時は、結構、同情されてたのよ。相手が悪かった、まだ若いんだから、これからいい人を見つければいいって。……

葉子のしゃべり方は、急に早くなった。

——……だから、次の人と付き合うようになってから、うれしくて、いい人を見つけてしまったって、何人かの人に知らせたの。よかったって言われたわ。どんな人か見たいから、連れておいでって、自分のマンションに呼んでくれた人までいたのよ。それだから、子どもができたのも喜んでもらえると思ってたの。だけど、全然、喜んでくれなかったから、びっくりしちゃった。……なんて言うか、悪口も言わないの。なんにも言わないで、いやな顔したの。……でも、まだよく分からないで、赤ん坊が生まれてから、一応、気にしてくれているといけないと思って、また、